

フィールド風

(現場)からの風

宮田守男

4月実施された白馬村議会選挙。地域に選挙基盤を持たない人を中心に活用されたSNSなどのネット選挙は、これまで政治に無

関心だった層に地域の問題点が伝わった。行政を行う側も、これまでの意識を大きく変えなくてはならないだろう。ケーブルテレビで実況中継された開票作業に不信感を持つ声が聞こえてきた。開票速報の遅延には疑いの見方さえ持つ有権者も。開票速報の現場からの実況は欠かせないが、多くの有権者は、開票作業の内容を知る者は僅かだ。選挙管理委員会が、開票事務の内容を伝えるため開票解説者を派遣してはどうだろうか。その積み重ねが、村の行政姿勢にも理解を示すは

ずだ。奈良に暮らす信州大学大学院での恩師・下田平裕身さんから届くコロナ通信。今回のテーマは「老いと死をケアする」。「ああか、こうかと老いを育てている最中」。老いのもたら

コロナ禍は「こころの終活」にも影響を及ぼしている

では、78歳までゆっくりクローラで1500m泳げたのが、79歳から急にしんどくなり、千メートルがやっとになり、今は泳ぐと言わぬより、沈みながら泳いでいる状況で、衰えを痛感したと。スタン

角度に進むと明らかにしている。この学説と向き合いながら、老いの先に待ち構えている死と、どの様に向き合わなければならないのだろうか。これからは「こころの終活」として、心身の衰えと向き合う中で、これまでの生き様を考えながら一人ひとりが人間への共感を深め、人間をやって良かったと思いつつ死を迎えたいのだが。しかし現代社会は、人間関係の複合的なつながりをどんどん壊していく。一方、人は、ますます孤立し、孤独になって行き人間と言うものに対し



目を和ませる道沿いのスイセンなど。株分けなどで広げて行く活動に感謝だ

して絶望感も深まって行く。老齢期の自殺が増えている。これから福祉の多彩な活動は、人間の厚いつながり合いを、発展していくべきだと指摘が心に響いた。(信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上)